

エッセイスト 近藤 節夫



アウシュビッツ収容所入口周辺

アウシュビッツという名を聞いただけで、暗く憂鬱なイメージに捉われる人は少なくない。シベリア帰りの旧日本兵や、戦勝国の元アメリカ兵も入場するのに躊躇していたという。世界遺産の中でも訪れてみて、これほど気持ちが落ち込むようなところは他にはない。

アウシュビッツとは、1940年にナチス・ドイツが政治犯を収容するためにポーランドのオシフィエンチム市郊外に建設したアウシュビッツ第1収容所と、少し離れたビルケナウ第2収容所の、2つの施設を総称した名で、アウシュビッツ国立博物館と呼ばれている。ここは、第2次世界大戦中ナチスの国家秘密警察(ゲシュタポ)の活動拠点でもあった。当初は主にポーランド人、一時的にはジプシーのロマ人や、ソ連兵捕虜、またユダヤ系ドイツ人のアンネ・フランクらも収容されていたが、最終的にはナチス・ドイツによるユダヤ系市民を大量虐殺するためのホロコースト施設となった。2つの収容所の犠牲者の数は、110万人を超えたと推定されている。

アウシュビッツでは正門を入ると、頭上に象徴的な言葉「働けば自由になる」とドイツ語で書かれた看板が掲げられている。周囲は外部との境界にはびっしり有刺鉄線が張られている。敷地内に入ると通路は碁盤の目のように、そして同じような木造建物が外見上整然と建てられ、見学し易くなっている。しかし、展示建物内に一歩足を踏み入ると当時の悲惨な様子を思い出させるガラス戸棚の展示パネルの中には、収容された人々の身の回り品や遺品、悲惨な写真が展示され、つい目を背けたくなり、とても長くは留まっていられない。

「死のブロック」と言われる処刑場へ立ち寄ると、そこにはゲシュタポによる即決裁判所がある。一応名目上は裁判となっていたが、死刑を判決するためだけの施設である。ほど遠からぬ場所に、アウシュビッツ収容所長・ナチス親衛隊中佐アドルフ・ヘスの事務所兼自宅があり、その近くにヘス自身が処刑された処刑台があるのが、何とも言えず異様である。

展示建物を出て有刺鉄線で厳重に囲まれた収容所群を通り抜け、第1クレマトリウムというコンクリート製の建物へ入る。ここには数百人を一度に殺戮させることができた悪名高い毒ガス室と死体焼却炉がある。

アウシュビッツ第1収容所から車に乗り約10分、映画「シンドラーのリスト」の撮影現場ともなったビルケナウ第2収容所に到着する。東京ドームの約37個分の広大な敷地に300以上の施設があり、収容所へはレンガの建物の中央部から入る。ここには列車の引き込み線が敷設され、遠路貨物列車で運ばれてきた収容者はここで降ろされ、運命の別れを迎える。光も射し込まないような3段式ベッドが詰め込まれた暗い寝室と、周囲には何の囲いもなく石に穴が掘ってあるだけの便器が横一列に並び、収容所仲間と対面して顔を合わせながら用を済ませるトイレがある。人間的な扱いなんてまるで感じられない。

各施設を見学しながら悲惨な歴史と残酷な写真に接すると自然に涙が溢れてくるが、スモレン元アウシュビッツ国立博物館長が常々話していた「涙を流すより考えて欲しい」という言葉は、とりわけ敗戦国日本人にとっては胸に堪える言葉である。

アウシュビッツはこの世の地獄のようなところである。戦争は地獄を生む。2度と同じような戦争を引き起こさないようにしなければ、ここで犠牲になった罪もない人々は浮かばれない。ここを去る時、強く感じたことである。



施設内へ入る。「働けば自由になる」の標語



収容所と外との有刺鉄線境界



収容所4号館内の展示品と写真



地獄への道を歩く収容者



ルドルフ・ヘス収容所長の事務所兼自宅(奥の建物)



ヘスが処刑された処刑台



死体焼却場内の焼却炉



ビルケナウ第2収容所中央入口